

第24回夏期特別集会（4）

福音的実存

――ガラテヤ書5章、6章――

1977年8月21日（鹿沢）

小池辰雄

「からの自由」と「への自由」 信仰は現なり ざるを得ない 棄身の愛 御霊は歩ませてくれる 無私の判断は聖霊から 愛は一切に勝つ 福音的実存 御霊によって歩まざるを得ない 御霊の愛を全うせよ キリストの波にのつかって波乗り 南無キリスト！ 聖霊の常燃の火 無為の為 聖霊のバプテスマ 祈り

【ガラテヤ5】

1 キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の轡に繋がるな。

2 視よ我パウロ汝らに言う、もし割礼を受けば、キリストは汝らに益なし。3 又さらに凡て割礼を受くる人に証す、かれは律法の全体を行うべき負債あり。4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたる、恩恵より墮ちたり。5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるることを待てるなり。6 キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。7 なんじら前には善く走りたるに、誰が汝らの真理に従うを阻みしか。8 斯る勸は汝らを召したもう者より出づるにあらず。9 少しのパン種は粉の團塊をみな膨れしむ。10 われ汝らに就きては、その聊かも異念を懐かぬことを主によりて信ず。されど汝らを擾す者は、誰にもあれ、審判を受けん。11 兄弟よ、我もし今も割礼を宣べ伝えば、何ぞなお迫害せられんや。もし然せば十字架の顛蹟も止みしならん。12 願くは汝らを乱す者どもの自己を不具にせんことを。

13 兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反つて愛をもて互いに事にせよ。14 それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。15 心せよ、若し互いに咬み食わば相共に亡されん。

16 我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。17 肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戾ればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。18 汝等もし御霊に導



かれなば、律法の下にあらじ。¹⁹それ肉の行為はあらわなり。即ち淫行・汚穢・好色・²⁰偶像崇拜・呪術・怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒党・分離・異端。²¹猜忌・醉酒・宴楽などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警む。斯ることを行う者は神の国を嗣ぐことなし。²²然れど御霊の果は愛・喜悦・平和・寛容・仁慈・善良、忠信・²³柔和・節制なり。斯るものを禁ずる律法はあらず。²⁴キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけたり。

²⁵もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。²⁶互いに挑み、互いに妬みて、虚しき誉を求むることを為な。

【ガラテヤ6】

¹兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘わるる事あらん。²なんじら互いに重きを負え、而してキリストの律法を全うせよ。³人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。⁴各自おのが行為を驗し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己にあらん。⁵各自おのが荷を負うべければなり。

⁶御言を教えらるる人は教うる人と凡ての善き物を共にせよ。⁷自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く所は、その刈る所とならん。⁸己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。⁹われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし。¹⁰この故に機に随いて、凡ての人、殊に信仰の家族に善をおこなえ。

¹¹視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。¹²凡そ肉において美しき外觀をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強う。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。¹³そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。¹⁴然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかには誇る所あらざれ。之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。¹⁵それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新に造らるる事なり。¹⁶此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫あれ。

¹⁷今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。

¹⁸兄弟よ、願くは我らの主イエス・キリストの恩恵、なんじらの霊とともに在らんことを、アアメン。



●「からの自由」と「への自由」

司会者が

「自分は何も霊的なものがない」

と言われた。私もそうです。何もない。およそ伝道者らしくない者なんです。けれども、聖霊の呻き、愛が、青草の上に降り注ぐ細雨のごとく、皆さんの心の中にしみ込んだと思います。これは御霊の愛なんです。私は自分が何者でもないものだから、自分の名前にみんな「天」をつける。天晨、天鐘。何でも天がつく。天が私の根拠、拠り所、立脚点だから。そうでなければやり切れないから、私は天と付けるので、自分が天的な人間だなんてことを思っているのではない。

今日は、『福音的実存』なんていう題を出しましたが、ここに集まっていraftしやる方々のそれぞれのの中に、キリストの愛が泉となつて、あるいは灯火^{ともしび}となつて、底光りを発し、また滾々^{こんこん}として流れ出て、もう私は何をか言わんと思つている。ただ、問題はこれからなんです。

「終りは即ち始めなり」

という。ある一つの大事な事態を、御言御霊に導かれながら、告白したいと思ひます。では、ガラテヤ書の5章です。

「キリストは自由を得させん為に我らを^と釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の轡^{くびきつな}に繋がるな。

「自由」はキリストがくださったんです。今、日本で、「自由の、自主の」と言つてますけれども、あんなものはみんな、ウソツパチと言つては悪いけれども、正直、根のないものです。マルチン・ルターが『クリスチャンの自由』を書きました。これはパウロからルターが学んだから。そして、パウロはこの自由をキリストからいただいた。律法に縛られていたパウロ、罪にがんじがらめになっていたパウロ、この律法と罪から彼はキリストの十字架によつて解放された。

「自由」というのは、罪からの、律法からの解放ということと、愛への自由と、二つの面をもっている。この両方ともキリストから来ている。「からの自由」は十字架、「への自由」は聖霊なんです。そういう自由をキリストが私たちにくださった。自由の消極面と積極面、この二極をパウロはしっかりと捕まえた。マルチン・ルターがそのことを『クリスチャンの自由』で書きました。あとで、ある一句を引用します。

普通は自由というと、自分が何か自由にできることが自由だと思つている。それは自分に捕らわれたることで、決して自由ではない。それはまがいの自由なんだ。世の中にあるところの自由は大方その質をもっている。だから、問題が起きてしょうがない。争つてしょうがない。しまいには、戦争だ。



●信仰は現なり

4 律法に由りて義とせられんと思う汝らは、キリストより離れたり、^{めぐみ}恩恵より墮^おちたり。

ダメだよと。それではキリストから離れてしまう。キリストという絶対恩寵から落ちてしまったと。

5 我らは御霊により、信仰によりて希望をいただき、義とせらるることを待てるなり。

パウロは

「恩恵により、信仰により」

と、エペソ書の中に書きましたが、ここでは、

「御霊により、信仰により」

と言つて、「御霊により」が先になつていることに気をつけていただきたい。

ヘブル書11章1節に、

「¹それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を^{まこと}真実とするなり。」(ヘブル11:1)

とある。「ピステイス」という「信仰」は、望むところの――「ヒュポスターシス」というのは、「実体、現実、リアリティー」であること――望むところのもののリアリティーが、実質が、実体が、まぎれのない現実が信仰であるという。だから、私は

「信仰は^{うつつ}現なり」

と言う。「希望」はいわゆる願望ではない。この「希望」というのは、ロマンチックな願望、希望ではない。現実には希望は現在に來ている。だから、本当に望める。

「天国は汝らの中にある。だから、必ず天国は来る」

と。みな、確証をもつてなされ、裏付けをもつてなされているのがこの福音の世界です。

「見ぬ物を^{まこと}真実とする」

とは、ギリシア語の意味は

「見えぬところのものの証^{うつつ}である」

という。「エレンコス」という字ですが、英語の「プルーフ」、ドイツ語の「ナツハバイス」という。そういう「証^{うつつ}拠」である。信仰が見ぬ物の証^{うつつ}拠である。それほど、信というのは現の世界です。

「見ずして信する者はさいわいなり」

と、どうしても見なければ承知しなかったあのトマスにキリストは言われた。

「どうしても信じないならば、私のわざを見る」

と。私は「根源現実」ということをよく言います。現象面でのこのうのではない。

「この根源の現実を本当に受けとつているか」

そこが本当の信の世界です。神の現実、キリストの現実、天地一如の現実。過去・現在・



未来を本当に今掌握しているところの現実です。うれしいね、ありがたいね。そういった、何ものよりも、ここに今電気が光っているよりも、もつともの凄く光っているところの聖霊の現実です。

⁵我らは御霊により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるることを待てるなり。

御霊により、信仰によりて望みがやつて来た。義とせられることを待つていふと。「義とせられる」というのは、信仰的現実において我々は義とされているが、それが生の現実において義とされるのは、終末の世界、新天新地においてであります。今はどんな人も、月が欠けている。満月になるのは、あっち側の世界です。けれども、三日月の片側に満月の姿がうつすら見える。それを、その希望の満月の姿を現実において、信において受けとっているのが、この信仰的現実なんです。

⁶キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。

「救われるのは、キリストを受けとることだけだ。救われると、どうしても愛に働かざるを得ないというようなのが本当の信だ。信にプラス愛とは言わん。けれども、信はかくならざるを得ない」

ということ、ルターもまたパウロもその角度から言っている。

●ざるを得ない

私はガラテヤ書の根本精神を、

「御霊に歩み、愛に働き、信に生きん」

という句にしてみました。「御霊に歩め」ということは後の方に出てくる。歩むんですよ、歩くんです。ただ瞑想しているのではない。御霊は実力をもっているから、歩るかざるを得ない。そして、信は愛に働かざるを得ない。そのようにして、生きざるを得ない。この言葉の奥はみんな、「ざるを得ない」ということです。ざるを得ない世界だけが本ものなんです。ただ意気込んだってダメです。風は吹かざるを得ない。雨は降らざるを得ない。光は輝かざるを得ない。熱は暖めざるを得ない。

これは内面的、内的な必然性です。そこが本当の自由の世界です。天的必然は即ち自由である。これだけが本当の自由なんです。天的必然を徹底的に生きたのがキリストです。キリストは正に天衣無縫、自由自在のひとであつた。それは何かというと、神さまに絶対に自分を投げ棄てていたから。神の言、業が彼を通して展開せざるを得なかった。そのような人であるから、これは天的必然即自由という。魂がそういう質にならなかつたら、本当に生きられません、生きていくような顔したつてね。必然即自由ということ。

「我が欲うところ矩を踰えず」



と孔子は言った。七十歳にして、自分の思うところが法則と合致する。欲と法が一つである。この「欲^{おも}う」は欲ではない。全部、法の世界です。

「法」というと、何かすぐ固苦しく思うが、そうじゃない。支那人は、「水が低きに流れ去る」ことを「法」という。低きにつく人は大海となる。どん底に立つ人が本当の力をもつ。上ろう上ろうと思うと、ひっくり返る。どん底になって、大海となると、今度はワーツと上昇して、天から雨となって降ってくる。水は凄^わいよ、循環して、環流しているわけです。環^わとなって流れていく。

「○」(丸、円)

真理の本当の表現はただこれ一つ。禅宗の坊さんが、禅はただこれだと言った。禅に限らず、福音もただこれ(○)です。円^円現^現という。

それがキリストがくださったところの、からの自由であり、への自由であるという、本当に凄^わい事態なのであります。

●棄身の愛

6キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。

「愛によって働くところの信仰のみ本当だ」と。「益あり」というのは、働く力があるということ。この「益」というのは、損得の得ではない。

11兄弟よ、我もし今も割礼を宣^のべ伝えば、何ぞなお迫害せられんや。もし然せば十字架の顛^{つまず}顛^{つまず}も止^やみしならん。

「十字架の躓^{つまず}き」なんていう言葉がある。十字架が躓^{つまず}きとなる。

「ギリシア人には十字架が愚かであり、徴はユダヤ人には躓^{つまず}きである」

と、別なところにもあります。

「キリストは躓^{つまず}きの石だ」

なんて言われた。この世的な判断で言うと、

「あんなキリスト教はおかしい」

なんてなわけだ。

13兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。ただ其の自由を肉に従う機会^おとなさず、反^{かえ}つて愛をもて互^ついに事^{つか}えよ。

もし肉に従う機会としたらばその自由は自由ではありませんよ、というわけだ。

14それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言に^まて全^まうせらるるなり。

キリストも

「おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし」



と、旧約から引つ張って言われました。そうすると、

「自分を自愛してもよろしい」

なんて思う。

「どうぞ、」自愛ください」

と手紙によく書くね。私は滅多に書かないけれども。「自分を愛する」ということは人間の本能なんだ。本能だけでも、

「自愛は最も悪い」

と西郷南洲が言った。南洲というのは不思議な人だ。彼は天を相手にして、自分なんか問題にしない魂であつた。南洲というのは福音的な魂です。鹿児島にある記念館の「敬天愛人」の字を見て、私はもう躍動してしまつたね。「愛する」とは、人助けをすること、荷なうこと。荷のない魂です。

「愛に働く信」というのは、もう一つ言えば、棄身の愛です。これはキリストの十字架がそのことを現してくださいました。

ここに懐かしい雑誌がある。『聖書之研究』(142号 明治45年5月10日発行)、これは私の兄貴が遺していった『聖書之研究』の一つなんです。そこに、村山モトコさんという人が書いた詩「不沈タイタニック号の沈没」というのがある。これを全部読むわけにいきません。あのタイタニックという、あの当時の世界最大の豪華船です。大西洋を渡つてアメリカへ行こうとして、ニューファンドランドの沖で氷山にぶつかつて、処女航海で沈没する。その時に、女・子供をまず救命ボートに乗せて、男の人は「主よ、み許に近づかん」という讃美歌を歌いながら沈んでいった。

「幸いなるかな、汝、タイタニックよ。汝は沈まんがために造られたり。義人の宝血に潔められて

キリストの血のことです。

汝は永久に生命を失われた。残るこの世の旅客を乗せて、心の舵(かじ)を過らしめず、愛の光明を舫(へら)に灯して、幾世の魂を渡すならん。この新しきエルサレムの国に。」

これは最後の句です、素晴らしい句です。

「人その友のために生命を棄つる」

という。もちろん、船長は船と運命を共にした。これが本当の聖霊の愛です。聖霊の愛は何処にあるか。そのような実存に現れる。言葉ではありません。

「汝の隣りを愛すべし」

と。己を愛することは本能だが、その本能の如く、その強さをもつて隣人を愛せよと。隣人をそのように愛するときには、己を棄ててかからなければ、愛せない。己を棄てることのできる力は御霊であります。

殉教者たちがそうでした。あの長崎の二十六人の殉教者たちは十字架に懸けられ、火に



焼かれながら、讃美歌を歌って、心からハレルヤをもつて、天界に往った。あの頃のカトリックの信者は素晴らしい。その種を蒔いたのがザビエルです。あのザビエルという伝道者は、日本語を知らなくても、彼の語るポルトガル語は既に霊言であるので、意味は分からなくとも、聞く人々は響きで打たれた。神の根源語が響く。私たちは素晴らしい音楽には打たれるでしょ。霊言、というのはそのようなもの。だから、聖書の言葉は、日本語でもヘブライ語でもギリシア語でもない。そこに神の根源語を、その響きを受けとる。

「儀文は殺し、霊は活かす」

という。

●御霊は歩ませてくれる

16 我いう、御霊によりて歩め、

御霊によつて歩みなさいと。「歩め」とパウロに言われて、こういう言葉を読むときに、それが単なる命令と思つたらダメですよ。キリストの言葉でもみんなそうです。

「御霊は歩ませてくれるぞ。本当に御霊を受けたら、歩まざるを得ないぞ。そうで

ないものは、御霊の世界ではないんだ」

ということ。さきほど歌つた讃美歌121番「まぶねの中に」の句に、

「この人を見よ」

とあつたが、キリストというこの人を見てください。彼は御霊で本当に自由に歩んでいた方です。電車の中でもどこでも、福音書を読んで圧倒されて、やりきれんですよ。キリストが凄くて、そして、捕まえてくださるから。キリストの「すべし、すべからず」という言葉が全部、

「私がさせる。そんなことは、お前はしない」

というように響いてくる。それでなければ、律法になってしまう。だから、キリストの福音に一般のクリスチャンは躓いているんです(異言)。そういう世界ですから。

さらば肉の慾を遂げざるべし。

自己本位の歩き方ではなくなるぞという。「肉」とは、自己本位のことをいう。いわゆる単なる肉情ということではない。地上では完全ということはない。けれども、御霊という完全性をもったものが破れ器の中にあれば、その人は劇的な展開をしていくんです。生まれつき質のいい人が楽にするよりも、生まれつき質の悪い人がそれと戦いながら進んでいく、その姿の方が尊い。

ユダヤ人なんていうのは、自我が強くて、質が悪いんだよ。その始末の悪いやつを神さまは捕まえた。ユダヤ民族、イスラエル民族は頑なな民であるという。その頑くさをぶち破る。まあ、どうですか。こんなキリストが出て来ても、またパウロが出て来ても、あいかわらず今のユダヤ人は新約聖書を受けとらないじゃないですか。なんと頑くななんだろう



うね、このユダヤ人というのは。

「パウロ、あれは間違っている」

なんて、冗談言うなど。

「ユダヤ人が本当に悔い改めたら、世界の終りが来る」

とパウロが預言している。けれども、全部は悔い改めないでしょうね。キリストは

「末の世に信を見んや」

と。ユダヤ人に限らず全世界の人たちにもう愛想をつかしていらつしやるかも知れない。
内村先生が

「もう、私は日本に愛想をつかしたと言ってくれ」

と、遺言のように吐いたそうです。藤井先生もある時、憤激して

「日本よ、滅びよ」

という詩を書いてしまった。逆説的な愛国の魂です。

●無私の判断は聖霊から

17 肉の望むところは御霊にさからい、御霊の望むところは肉にさからいて互いに相戾もとればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん為なり。18 汝等もし御霊に導かれなば、律法の下にあらじ。19 それ肉の行為はあらわなり。即ち淫行・汚穢けがれ・好色・20 偶像崇拜・呪術まじわざ・怨恨うらみ・紛争あらそい・嫉妬ねたみ・憤恚いきどおり・徒党・分離・異端。21 猜忌そねみ・醉酒・宴樂などの如し。我すでに警めたるごとく、今また警む。斯ることを行う者は神の国を嗣つぐことなし。

17節以下に、自己本位の行為はこれこれである、と書いてある。けれども、

22 然れど御霊の果は愛・喜悅よろこび・平和、寛容・仁慈なまけ・善良、忠信・23 柔和・節制なり。斯るものを禁ずる律法はあらず。

そんな項目はいくつあったっていいですよ、そんなことは。大事なのは一番最初の

「御霊の果は愛なり」

という言葉です。

手島さんが『聖霊の愛』という本を書きました。私は無条件に、「そうだ!」と言った。無教会の人たちは、そういうものが出てきても、何か偏見をもつて見る。私は白地だからね、本ものは映るんです。彼が『異言論』を書いた時に、

「私は異言は分らん。けれども、それは本当だと思う」

と手紙に書いたら、彼から

「この異言論を本当に受けとってくれたのは小池先生だけだ。あなたの手紙は家宝にしておきます」

という手紙が来た。この人がどうだこうだではない。およそ誰が言おうとも、真理は真理



なんだ。

そういう無私の、私無き判断は聖霊からくる。だから、何を読んでも、本ものはみんなキリストの光で、白光でもって私はそれを見てしまう。そして、それをみんな消化してしまふ。楽しくてしょうがない。捕らわれているのではなくて、みんな捕らえてしまふ。

「小池なんていうのは福音を、まるでシンクレティスムスに、こんこう混淆宗教に、雑多な宗教にしてしまった」

ごとくに思うやつがあるかも知れない。何と言われたっていいよ、そうじゃないんだ。中心がもの凄い所にあると、ウワーツともの凄くそれは一切を包摂してしまうから。中心の焦点の「二つ」は、白熱している所はウワーツとすべてを照らしてしまう。太陽の如く。だから、日本人は太陽を国旗としながら、なぜ、この国旗を本当に尊ぶことをしないか。私は、元日、二日、三日と三日間、国旗を掲げておいた。

「あれは明治の人間だから、あんなことをするのだらう。国粹だから、気をつけろ」

なんて思ったかも知れない。何とも思いやがれた。そんなこととは次元がちがう。私は国旗(日の丸)を見れば、そこにキリストを見るわけだ。「義の太陽」とマラキ書(4:2)の中に書いてある。

●愛は一切に勝つ

²⁴キリスト・イエスに属する者は肉とともに其の情と慾とを十字架につけた
り。

²⁵もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。

「御霊によりて愛に働く信に生きん」

ということ。御霊はもの凄い生命力です。この生命力の質は愛なんです。

「愛は一切に勝つ」(アモール オムニア ヴィンキット)

とは、ヒルティの好きな言葉です。彼の墓にこれが刻んであるそうです。愛より力強いものはない。

「ほの暗き燈火を消すことなく」ともしび

という、非常に静かな愛であるとともに、また、もの凄い熱をもった愛です。愛の姿も千変万化です。

「愛は一切に勝つ」

とは

「愛は一切を救いあげる」

ということですよ。愛はすべてを救いあげる。お釈迦さんも「大慈大悲」と言いました。己を棄ててかかっているんです、お釈迦さんにしろ、キリストにしろ。仏教が好きな人は大いに仏教の世界でやってください。そのかわり、本ものの仏教を、原始のところを捕ま



えてもらいたい。私は、くだらない隔てや判別や分別を超えた、超分別の世界なんです。

面白い、いい歌があるよ。誰の和歌だか知りませんが。

「人をのみ渡し渡して自らは陸に上らぬ渡守かな」
おか わたしもり

渡守は舟に人を乗せて、みんな向こう側に渡して、此岸から彼岸に渡す。けれども、渡守そのものは渡って行かない。これが本当の愛の姿です。たとえ地獄に落ちて人も人を救わんという。天国の門が閉ざされる時に、せめても殿に入りたいという。日本人の中にはいい魂があるんです。

「実存」なんて言ったってね、私は人間の実存なんていうのを問題にしているのではない。そうしたら、また再び律法になる。福音的実存とは自分が本当に受け身になって、キリストがその中で実存してくださる。キリストを見てくださいますよ。

「私は何もできない。何も言えない」

と仰ったではないですか。だから、私は『無者キリスト』という本を書いた。青年が

「善き先生」

と言ったら、

「なぜ、私のことを善きと言うか。神さまの他に善いものはないではないか」

とキリストは言われた。こういう、相対判断を絶したところの、キリストの魂の気魄を受けとらなくては。キリストの実存は、

「神さまが私を通して実存していらっしゃるんだ」

と。それを100%に彼は受けとっていった。彼は自分が私無き者、無私であったから、その無私の無が焦点を結んでいるところの無なんです。そうしたら、無限無量のキリストである。

「南無阿弥陀仏」

というが、南無阿弥陀仏という言葉そのものは実は、キリストが現しておられる。

「無量寿・無量光(阿弥陀)なる覚者(仏)に帰依(南無)せん」

ということ。その「無量寿・無量光なる覚者」、それは即ちキリストですから。私たちはこの無量寿・無量光の覚者であるところのキリストに帰依せんとする。帰入せんとする。だから、私たちも「南無阿弥陀仏」と祈ったって構わない。あれはそういう意味なんだ。

「あれはクリスチャンのくせに、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言っているな」

なんて。まあ、そんな言葉を使ったら困りますから、言いませんけれども。あれは本当にそうなんだ。一番、キリストを現している。

●福音的実存

私たちの中に御霊のキリストが働き給うときに、本当の意味でこれを福音的実存と言える。もちろん、人間はそれを100%にはできません。努力もしてください、励んでもください。そういう劇的構造になっているんだから。人間なんてものは割り切れたものではない。け



れども、一番の根源意識は何かというと、

「キリストだけだ、私ではない」

ということ。この根源意識をもつて進んで行けば、躓いても転んでも、何があっても前進して行ける。

「我既に得たりと思わず、いよいよ、これを得んと思う」

とパウロが言ったが、その言葉の前に何を言ってるかというところ、御霊に捕らえられていることを言っている。だから、

「いよいよやるぞ。また、やれるぞ」

と言えるんです。その「やるぞ、やれるぞ」はみな力が来ている。単なる自力ではない。それで、自らが本当に鍛えられていく。

一日のうちの、何時間だか、何分だか、何秒だか知らんけれども、そういうところを本当に私たちが生きていかなければダメなんだ、福音というならば。また、そういうことを生きていかなかったら、必ず信仰はダメになります。そこに乗っかって生きていけば――一日の何時間でもいいよ、あるいはちよこちよこでもいい――そうしたらば、

「ああ、本当の生命はこれだなあ」

と、段々、身についてきます。人の毀誉褒貶なんか問題でなくなる。人が嫌がることを喜んですることになる。

ルターが

「ミット ルスト ウント リーベ」(楽しみと愛をもつて)

と言った。

「楽しみと愛をもつて為す業でなければ本もののわざではない。ところが、律法の義では、本当のその楽しみと愛が出てこなかった。いつも苦しかった。しかし、

霊(ガイスト)が来たから、そのようなことになった」

と言った。ルターはそれでうれしくてしょうがなくなった。

何ごとも、始めは辛いよ。けれども、本当の世界に入ると、必ず喜びが伴う。勉強でも、仕事をするのも、何でも。そこに喜びが伴わなかったら本ものでない。喜びを求めるのではないよ。幸福を求めるのではない。「幸せ、幸せ」なんて言うけれども、それはこぼれてくるところのものです。でなかったら、いわゆる幸福主義になる。

あの『幸福論』を書いたヒルティは――今度、私はヒルティとつ組みながら著作集の第五巻(『百世の師ヒルティ』)を書いたけれども――あのヒルティは決してそういったような幸せを書いているのではない。「幸福」という言葉がむしろ躓きになる。ドイツ語で「グリュック」(幸福)という言葉は聖書にはほとんど出てこない。「ゼーリツヒカイト」(祝福)という、「恵み」という字が出ている。

「さいわいなるかな……」



の「マカリオイ」という字も「幸せなるかな」ではない。

「祝福されたるかな、恵まれたるかな」

なんです。

●御霊によって歩まざるを得ない

²⁵もし我らの御霊に由りて生きなば、御霊に由りて歩むべし。

「もし」なんて、なぜパウロは言うか。こんな「もし」なんか付いていても、あなた方は「もし、もし」になっってしまったらダメなんだ。

「私たちは御霊によって歩かざるを得なくなってきたから、御霊によって生きざるを得なくなってきたから」

ということ。「生きている」というのは、「御霊があるから生きている」ということが本当に言えるんですよ。御霊のないところに生命なんかない。

「御霊によって私は本当に生きているということになったら、御霊によって歩まざるを得なくなるよ」

と、なぜ、パウロはそう書いてくれないか。だから、私は新約聖書のパウロの言葉でも時々、まだるっこくなってしまう。パウロがこんな言い方をするものだから、躓きになる。

一体、こんなことを言う伝道者とか、註解者とか、神学者とかがいるかね。だから、学者のリストなんかには私はのっかりはしないよ。私はアウトサイダーだから。ところが、キリストの世界のインサイダーになれば結構でございます。

「人に喜ばれんとするか、神に喜ばれんとするか」

という。

●御霊の愛を全うせよ

では、6章にいきましよう。

「兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘わるる事あらん。」

パウロさんという人は非常に烈しい人だが、しかしまた本当に、このような懇ろな言葉を発している。ルターの言葉にこういうのがある。

「聖霊は信仰の教えを維持し弁護する点においては、最も緻密であるけれども、人が罪を犯して、これがために悲しんでいる場合には、罪を赦し、これを福さいわいならしめることにおいて、柔和にして憐れみ深い霊である」

と、ルターがここのところを註して、そのように言ってます。人の罪を、過ちを摘発するのはサタンの心。それを覆って執り成し、そして赦すのは天使の心。天使となるか、サタ



ンとなるか。

「人を審く人は自ら審かれるぞ」

とキリストに言われる。パリサイになるなど。

「偽善なるかな。学者、パリサイ人よ」^{びと}

と、キリストがあればほど激しく、マタイ伝23章で七度も繰り返して言われた。よほどひどかったらしいね、あの頃のパリサイ人というのは。祭司だの、学者だの、そういう専門家をキリストは相手に――キリストは本当の素人^{しろうと}です――素人だが、これは天的素人だから、専門家はかなわない。

「キリストはいかなる範疇にも入らない」

と私は書いたでしょ。人間のイズムや範疇に入るような、そんなところではまだダメなんです。

2 なんじら互いに重きを負え、而してキリストの律法を全うせよ。

「キリストの律法」というのは御霊の愛のこと。

「御霊の愛を全うせよ」

という。この愛は力強いんですよ。力強い愛の現れ方はなにも強烈に現れるばかりではない。千変万化の現れ方をする。

「喉の渴いている者に一杯の水をやる。その行為も決して空しくはない」(マ

タイ10・42)

とキリストは言われた。

「^{おさなご}幼子を躓かせる者は、^{いしうす}石臼を首に懸けられて海の中に沈められんかた益なり」

(マタイ18・6)

なんて。まあ本当に小さな子を見ていると、どこの国の子供でも可愛いね。子供の世界は国境がありません。大人の世界ばかりだ、国境があつて。国境ばかりではない。隣の垣根との間がちよつとこれだけ出たの引つ込んだのと、くだらないことを言っている。全く情けないね。何を携えて次の世界にいけるんですか。何も携えて行けない。私はこの愛読している聖書くらいは持つて行きたいけれども、それもできない。もう、自分自身がこの聖書とならなければ。天界には何も持つて行けない。キリストの御霊が内住して聖書の文字が化体する、これだけが次の世界に行く大事な持ち物なんです。

そして、その行く資格は何かというと、愛に働いた信である。縦の関係がはつきり立って、横に展開せざるを得ないところの姿である。だから、私たち自身が十字架なんです。「主のみ十字架を負わせまつり」という讃美歌331番はその角度であります。力んで十字架を負うのではない。キリストがこの御霊の力をもって十字架を負わせてくださるんです。それが天国の土台となる。天国行きの資格となる。けれども、業^{わざ}を業として、何か信仰と分離して、



「お前はどれだけのことをしたか？」

なんて、そんなことを神さまは問うのではない。

最後の瞬間に、散々悪いことをした片一方の十字架の盗賊が

「せめても私を覚えてください」

と心砕けて言ったら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだぞ」

とキリストは言われた。キリストに自分を全托したこのことが、これが本当の信であります。もう他の人を愛する暇は彼はなかったけれども、その心をキリストは受けとられた。誰も人のことを

「あの人は天国に行く、地獄へ行く」

なんてことは絶対に人のことは言えない。神さまだけが判断なさる。人間のいかなる尺度も、これは合わない。

「仏教だ、キリスト教だ、イスラム教だ」

ではないんです。

●キリストの波にのっかって波乗り

⁸己が肉のために播く者は肉によりて滅亡^{ほろび}を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。

その通り。自己中心においてこの世を送る者は地獄行きだと。地上の実存が次の世界のその人の位置を決定する。誰も知らん。それが審判なんです。「御霊のために」の「ためには」「エイス」という字を使つてある。「御霊の中へ」ということです。

⁹われら善をなすに倦まざれ、もし撓^{たゆ}まずば、時いたりて刈り取るべし。¹⁰この故に機^{おりしかた}に随いて、凡ての人、殊^{こと}に信仰の家族に善をおこなえ。

パウロは根本的なことを言ったあとで、いろいろなことを具体的に戒めをもつて言うんです。あまり高次元のことばかり言つたのでは、みんな目を丸くしてしまうからね。分かるように。けれども、パウロは決して新しく何か律法を言っているのではないということだけははっきり見てもらわなければ困る。そういう言葉は懇ろに、謙虚に受けとつていなくてはいいかん。我々自身の構造が高次元なものもあれば、低次元なものもある。いろいろあるんだから。

余り先取りしてはいかんですよ。余り先取りして、私の話を受けとつたかと思うと、足をすくわれてガタンと落ちたりする。私も蹉蛇^{さだ}たる歩みだけれども、右に折れ左に折れ、しかしながら、磁石が北を指すごとくに、とにかく70年間やつてきた。けれども、私は70年間歩いたなんてはひとつも思わない。まだ2、3年のつもりだ。これからだ。これからです、私の生涯は。



キリストの波にのつかってね、私は波乗りが好きだ。今でも泳ぎますよ。もう泳ぐ暇がなくなつて困つたけれども。私はプールが嫌いだ。波のあるところが好きだ。波を潜つて泳ぐのが好きなんだ、潜水艦みたいに。泳ぎというのも、静中の動、動中の静という、そういう呼吸がある。頭を上げて泳いでいたら、くたびれますよ。頭はスイカのように水の中に付けておかななくては。頭は重いんだからね。そうしたら、浮かざるを得ない。浮くようにできいる。ことに太った女の人はすぐ浮いてしまう。身体のを抜いてくださいよ、必ず浮きますから。

「さあ、浮こう」なんて思つたら沈む。浮こうとしたら沈む。沈もうとすれば浮くんだ。これはもう真理は共通なんだ。任せてしまふ。波に任せてしまふ。一つのストロークをかけた後は、全身を波に任せてしまふ。その次のストロークの間にちゃんともう休んでいる。静がきて、その次には動がくる。静動こもこも受く。だから、くたびれない。

そのように御霊の世界に入ると、何をやつても何か秘訣がわかつてくるし、創造的な力が出てくる。何をなさつても。「何をするか」は問題じゃない。

「それを如何にしているか」

が問題。その「如何に」の質を与えるものが聖霊なんです。どうせ、人間のすることは高が知れているよ。

●南無キリスト！

11 視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。

パウロももうやり切れないから、こういうことを言う。

12 凡そ肉において美しき外観^{うしろみ}をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強う。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。

さつきから一生懸命で割礼の問題を、ユダヤ人だから言つて。まあ、そんなことはいいです。

13 そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。14 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。……

「私たちには我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ」

とはつきり、パウロは言っているじゃないですか。パウロは誇ることの好きな男だったんだよ。「誇る」という言葉がよく出てくる。ところが、彼は自分を誇ることはもう

^{ちりあぐた}
「塵芥の如く」

に棄ててしまった。「誇る」という彼の感情、心の動きは全部、キリストの方に切り替わつてしまった。

「キリストの十字架が、私をこのように律法から、罪から、サタンから、陰府^{よみ}から



解放してくれた」

と。これを私は悪の四位^み一体と言う。「サタン・陰府(地獄)・罪・律法」。本当は律法はそうじゃないんですけれども、いわゆる律法です。「罪」とは自我、我執^{わがしゆ}のことで、この罪あの罪ではない。我執^{わがしゆ}の我です。

ルターは「白きサタン」と言った。「黒きサタン」はわからない、すぐにみんな分かる。黒い姿で来てるから。ところが、白いサタンがいる。見掛けが大変結構なんです。そして、人をたぶらかす、誘惑する。これを「白きサタン」とルターが言った。気をつけなければならぬのは、この「白きサタン」です。悪意をもつて正面からぶつかってくるやつが、これは「黒きサタン」です。それと戦うときは、いいですか、

「主さま!」

と言って、キリストを称えなさいよ。ルターが

「ある小さな言葉がサタンを倒すことができる」

と言った。それは「十字架」とか「キリスト」とかいう言葉です。「南無阿弥陀仏」と同じだ。私たちなら

「南無キリスト!」

という小さな言葉がサタンをやっつけてしまう。その世界にいれば、何も発しなくても、相手が何だかこれにかなわんと思う。

女の若い方々は、いいですか、それだけのものを内側に宿してください。負けてはいかん。

「我よりも、何々を愛する者は我にふさわしからず」

とキリストは言われた。キリストから離れて、どこへ行くんですか。それだから、パウロがローマ書8章の後半でもって絶叫しているではないですか。

「我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるものは、天

上天下、何があるか」

と言って絶叫している。

もう、パウロの文字は叫びなんです。叫び、呻き、讚美。考えて書いてやしませんよ。それが、一生懸命でもって研究している。

「この所は辻褄^{つじつま}がちよつと論理的にあわない」

なんて、何をぬかすか。生きている世界は、そんなロゴス的な論理でもってケリがつくような世界ではありません。

「然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ」

と。ありがたくてしょうがない。

私はさつき歌っていただいた、讚美歌121番「まぶねのなかに」は大好きです。あれは由木康^{ゆいき}さんという方の歌だ。由木^{ゆいき}さんはあの歌ひとつを作っただけでも、彼は地上に來た存在の意味は全うした。滝廉太郎が「荒城の月」を作った。中山晋平が「波浮^{はぶ}の港」を作っ



た。とにかく、珠玉のものを一つ、自分の全生命をうちかけて、全身をうちかけて作って、世のため人のために贈れば、それが本当に使命を果たしたことになる。あなた方一人一人が必ず何かできる。御霊の世界で。人が気がつかなくなっていたいい。天界に記しるされているから。天の巻物に書かれている。地上の歴史家の歴史は間違いだらけ。ところが、天の巻物には記されている。私は黙示録の巻物を詩に書きたいね。

●聖霊の常燃の火

之によりて世は我に對して十字架につけられたり、わが世に對するも亦然り。

パウロがいかに十字架中心であつたか。ルターの神学が「十字架の神学」と言われる。ところが、「十字架、十字架」と言いながら、本当の十字架に来てないし、また、十字架をいい加減にするものもあるし。まあ、いろいろだね。無教会は「十字架、十字架」だよ。けれども、

「十字架、十字架」

と言っているパウロが、本当に今度は

「御霊、御霊」

と言っている。その御霊の方をどうしてくれたんだ、無教会は。内村先生は御霊の火花は散らしているけれども、常燃の火になさらなかったから、

「お前たちは、これを常燃の火にせよ」

というのが、本当に内村先生の悲願でしょう。それを、火花も消してしまった。

十字架というのは何ですか。愛じゃないですか。相手を救う愛じゃないですか。パウロの十字架なんてものは、決して一つの意味じゃないですよ。もの凄い審きと、もの凄い赦しとがある。また、赦しには、今度は本当の責任がかかってくる、使命がかかってくる。その責任、使命を果たさせてくれるのは、これはまた御霊の愛である。

棟方志功が『板極道』という本を書いた。そこで

「自分の描くものに責任を負わない。私は何かしらんけれども、描かせられている。責任はその描かせている方にあるんだ」

ということを言っている。私は著作集第二巻に引用しておいたでしょ。あの第二巻の「芸術のたましい」という最初の論説は私は一気呵成に、憑かれるようにして書いたんです。

私はそれぞれの人たちのそれぞれの善さというものを見損なわないつもりです。問題は、何をしていても、

「福音が本^{あかし}に証せられているか。御名がそのことによつて讃えられているか」これだけです。そうでなかったら、変なことになる。

もう、やりきれんです、この福音はありがたくて。もう、突き抜けたバカ者にならなければ、本当の世界には入れない。また、この聖霊はそういうバカ者にしてください。良寛は自分のことを「大愚」と言った。大バカ者。この大愚先生の、良寛の歌や詩を読みましたか。



驚くべき詩人です。驚いたね、こんな漢詩を書かれたのかと。いつ勉強したのだらうと思う。けれども、そんなことを良寛はなにもとも思っていない。

すべて自分のやることを何とも思っていないで、「主さまだ」と言っただけで、上からの智慧と力をいただいたに過ぎない。こんな楽なことではないし、こんなありがたいことはない。どうぞ、皆さん、ケチくさい魂にならないでください。突き抜けた魂になってください。どう思われたっていいじゃないですか。

「我、汝を悦ぶ」

という人になりたい。それは、キリストの前にぶっつぶれていけば、そういう声が来るから。

●無為の為

老子が「無為」ということを言った。何も為ない。ところが、無為の老子が最も激しい行為をした。「無為の為」という。老子の教えを聞いた孔子は

「この老子は大変なやつだ。天の龍みたいなやつだ」

と言ったという。その気魄からいったら、孔子以上ですよ、老子の方が。

「天命これを性という。性に従う、これを道という」

と、これは「中庸」の中の言葉です。本当の性は天命である。天の命令、聖意、それが本当の人間の本性である。性に従う、これを道という。だから、天命に従うところに道がある。

「我は道なり」

というのは、キリストは神の天命に従っていたから、これを本当にキリストは「我は道なり」と――定冠詞がついている、

「我こそは本当の道だ、本当の生命だ、本当の真理だ」

と――それは神さまが、道としてくださっている。神さまが真理として具体的に現してくださっている。真の理まことというのは観念の真理ではない。

無難禪師というのがある。「至道無難」という。この無難禪師が

「生きながら死人に成りて成り果てて思いのままにするわざよき」

と言った。「生きながら死人に成りて成り果てて」といったら、何も無いではないですか。全くこれは十字架の世界です。我々で言うと、「十字架せられて」ということ。

「生きながら十字架せられて、御霊のままに動く」

のが「思いのままに」だ。「するわざよき」、それだけが本当の善きわざだと。

「死人に成り果てたやつが思いのままに何ができるんですか?」

と、平面論理ではそう言うよ。それは平面論理の世界ではないから。「成り果てて」、そこに「思いのまま」のこの「思い」はもはや「わが思い」ではない。「わが思い」なら「成り果てて」はいませんよ。この「思い」は天の思いです。禅の上からは「梵ぼんの思い」だ。これは私たちで言えば、



「生きながら十字架によつて死人に成りて成り果てて、御霊の働きによつて思いのままにするわざよき」

ということになる。こういうように福音の角度からはつきりもつと淒く受けとれる。

●聖霊のバプテスマ

¹⁵それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、

洗礼を受けるも受けぬも共に数えるに足らない。水垂らしの洗礼でも、浸礼でもいいよ。問題は御霊の洗礼を――

「この人は御霊と火をもつてバプテスマをする者である」

と洗礼のヨハネがキリストのことを指して言っているじゃないですか――なぜ、あれを本式に受けとらないんですか。キリストから聖霊のバプテスマをなぜ受けとらないか。それで、クリスチャンの顔をしたって、

「御霊をもたざる者はキリスト者にあらず」

とパウロが言っているとおりです。

「何か知らるが、私は変わりました」

ということが、皆さん一人一人が言えなくてはウソだ。

「変わったかもしれない。変わったらしい」

なんて、何を言うか。変わったものが入っているんです。本当に受けとってください。

ただ貴きは新に造らるる事なり。

新生すること。新たに生まれることなりということ。

「人新たに生まれずば、天国に入るわけにはいかない」

とキリストが言われた。第一の誕生に対して第二の誕生を迎えなければ。

「私の第二の誕生日は何月何日だったかちよつと忘れしました」

なんて、いいよ、忘れたって。本当に第二の誕生日を迎えていればね。

¹⁶此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫

あれ。

「神のイスラエル」であつて、いわゆるイスラエルではない。地上の、アブラハムの血統のイスラエルではない。

¹⁷今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。

「印」とは「ステイグマ」という言葉です。十字架の印を身に佩びた者である。パウロは、煩わすなら、煩わしてみろ。そんな煩わしには引つかからないぞ。私は十字架を

おびている。十字架の印を霊の中に刻みこんでいる。わが心の中に、心臓の中に。」

と。ルターはどこから思いついたか知らんけれども、バラの花の中にハートを書いて、そして十字架を書く。これはルターの印です。彼が作った紋章みたいなもの。この自分のハ



ートは十字架が破ってしまっている。十字架が勝っている。それはルターはバラの花が好きだったんだろう。雅歌書から来ているかも知れない。あれはユリともバラとも訳すから。藤井先生も塚本先生も

「私たちの心臓はもう十字架で破れている」

なんてことをいつか仰ったことを知ってます。いわゆる人間的なハートではないという。人間的な同情なんかしてはダメですよ。本当の愛は、その時に相手を怒るかも知れない。親に対して背くかもしれない。けれども、本当のどん底の愛は、その現象の奥でもって包んでしまっている、荷なつてしまっている。とにかく、私たちがこの「福音的実存」と言うのは、キリストが私たちの中で御霊をもって実存し給う。それにとにかく

「一生懸命にそのようにして生きましょう。そして、かく生きざるを得ません」

という事態を自分の日常生活でもって体験していくこと。また、体現していくこと。それであれば、信仰が必ずダメになる。ゲートルが、

「行為をもって認識する」

ということを行いました。正にその通りです。あの眼でもってよく見るゲートルが

「本当の認識は行為をもつてする」

と言った。『ヴィルヘルムマイスター』の終りも、『ファウスト』の終りも、そのような、

「他の人たちに対する恵みの行為が人生の目的である」

と言っている。まあ、何と言っても、向こうの一流の人物はみんな聖書から来ているんです。

それで、聖書を読まないでゲートル研究なんかしたってダメだよ。

私たちは、私たちの身にパウロと同じイエスの印、十字架をおびた。この十字架を負わしめるものはこの御霊の力、聖霊の愛である。終わります。

● 祈り

祈ります。御霊、御言をもって、この三日間を親しく導き、また掴みかかってください。た主さま、感謝いたします。この破れ器をとおして、あなたは私を通した言葉以上のことを語り、また示してください。一人一人はこれを受けとらしめられたことを感謝いたします。兄弟姉妹たちはみな一つとなつて、それぞれの役割を果たしてくれました。福音的実存をこの集会そのもので証しせしめられて感謝いたします。

どうぞ、このような事態が日常生活において、それぞれの所において、実現していくことができそうですように。回りが冷たければ、聖霊の愛の熱をもって暖めてやります。暗ければ、御霊の光をもって照らして、闇を光に変えていきます。どのように思われても、あなたの自由をもつて、自在にそこを天国的な現実を展開していくことができます。どのようにそれがなりましようとも、結果は考えません。ただ、そのように歩かせてください。そして、必ずあなたが、……(以下録音切れ)

